

## 写真活動での当事者理解

「当事者の素晴らしい感性を写真で発見！」の講話を聴いて

地域生活支援センターすみよし 水早 真之

平成 24 年 1 月 20 日（金）佐土原総合文化センターにて、障がい者写真集団「えん」主宰・写真家・小林順一氏の講話を聞かせて頂きました。

今回の講話で、まず感じたことは、「えん」の方々が撮る写真の美しさやアイデア、ユニークさでした。私自身、趣味で写真をしています。休日、一眼レフカメラを片手に 1 歳の息子を連れて公園等に行き、息子や様々な被写体を写真に残しています。どの写真も息子や大きな被写体を中心に撮影し、今までは自身の中で満足していました。

しかし、今回の講話の中で紹介された写真を拝見する中で、「ハッ」とさせられることが多々ありました。道端に咲く一輪の花や公園のベンチ、外灯、宮崎の空、船をぼかして指にとまるてんとう虫、宮崎市の町並み等どの写真も私たちが住んでいる地域・日常であり、美しい花や風景は身近な所に存在しており、撮影の角度を少し変えるだけで被写体は様々な表情を見せ、どの写真にもそれぞれの物語や歴史があることを感じました。ただ単にカメラを構え、あまり何も感じずにありきたりな構図の写真撮る私にとって「えん」の方々の感性の素晴らしさを痛感しました。この素晴らしい「えん」の方々の写真が、世に出回り、評価され、より一層自信と誇りの回復に繋がっていくことをいちファンとして応援させて頂きたいと思いました。

また、講話の中で、小林氏の「当事者の方に病気になって良かったと思って欲しい」「病気になった息子に感謝している」という言葉は大変印象的でした。病気になったからこそ人との出逢いや繋がりがあり、今回の写真のように日常に溢れている美しい風景に気付くことができ、そして、誰かが苦しんでいる時、誰よりも早くそっと手を差し伸べることが出来るのではないのでしょうか。ストレス社会と呼ばれる世の中で慌ただしく生きている私は、大切な何かを忘れがちで、身近に点在する癒しや人の温かさに気付かず過ごしてきているように思えます。

当事者の方やそのご家族の方々の中には、障がい受容が出来ずに苦しんでいる方や周囲の障がい理解が不十分であるために差別や偏見を受け、辛い思いをされている方が沢山いらっしゃいます。今回の小林氏の講話を聴くと、きっとその方々の心が軽くなることと思います。

そして、講話を聴いた全ての方が、一人一人にとって大切なものを再確認し、何気なく流れている日常を見つめ直し、優しい気持ちになれるのではないかと思います。

同じ地域・社会で生きる人々・ピア（仲間）が、小林氏の講話を機に優しい気持ちになれることで、自然と障がい理解にも浸透していくのではないかと感じています。「障がい者」「健常者」と分けて捉える社会ではなく、「人」「仲間」として誰もが暮らしやすい地域・世の中になることを切実に願っています。

そのためにも、微力ではありますが「今、私が出来ること」を考えながら、日々業務に取り組んでいこうと思っています。

## 障がい者写真集団「えん」の途轍もない可能性

一般社団法人宮崎県住マイルセンター  
専務理事 中武 功見

2012年1月20日、青く澄み切った睦月の空の下、宮崎市佐土原総合文化センターにおいて、広瀬地区ふれあい交流会が開催された。そのメイン講演として、障がい者写真集団「えん」を主宰する写真家小林順一氏が、「写真活動を通しての当事者理解～当事者の素晴らしい感性を写真で発見！～」と題し、当事者の撮影したコメント付きの20枚ほどの写真を紹介しながら話を進められた。

プロジェクターからスクリーンに映し出される一枚一枚の写真が、日常に流されながらただ漠然と生活している私に、大きな衝撃と危うく遅きに失するところだった気づき、そしてなによりも温かな希望を与えてくれた。

普段はついつい見過ごしてしまう道端の雑草の花や、看板の中にある小さなオブジェ……。

それらの有機物は勿論、無機物にさえ彼らは確かな息吹を与え、見る側のその時々感性を優しく刺激する。

また、「馬と会話ができたような気がしてとりました。撮って写真を見て納得しました。」

と撮影者のコメントの付いた写真は、白い馬の顔を下方から青い空を背景に大胆にトリミングしたような構図で、その画面構成の面白さと、本当に馬が語りかけているような豊かな表情から、撮影者と馬の会話を想像する楽しさや、自分だったら何を話そうかと興味が尽きない。

さらに、「撮影に行くときに写した写真で、爽快と歩いている姿が気に入ったので撮りました。」とコメントの付いた写真は、画面の右上に二人の足だけが入り、ややピンボケしている写真だが、そのブレが逆にスピード溢れる躍動感と撮影者の言う爽快感が見事に切り取られている。

画面には二人の足以外何も写っていないが、二人の足音・話し声、街の喧騒などが耳元に聞こえて来そうな作品である。

このように、各々の写真のモチーフ設定や画面構成などは、小林氏が事前に教え込んだりしたものではなく、撮影者である当事者の“素晴らしい感性”そのもので、まさにその感性が見る側に驚きや気づき、感動を与える。また、写真と一体になったコメントが、時間を切り取った瞬間の撮影者の思い・願いを見る側と共に共有でき、さらに空想は果てしなく広がる。

小林氏は言う、「精神障がい者が、地域に出て住民と触れ合う中で、自分の感性を発見し、地域の素晴らしさを再発見することで自信と誇りを回復する。」と。そこには“途轍もない可能性”に満ち溢れているのではないか。そのことを実感するためにも、私もデジカメを持って、彼らと一緒に街に出てみたいと切に思う。